

4 年 2 組 国語科学習指導案

場 所 4 年 2 組教室

1 単元名 新美南吉の表現を味わい、続き話を書こう

2 教材名 ごんぎつね（新美南吉）

3 単元のねらい

【関心・意欲・態度】

・「ごんぎつね」の登場人物の心情を読み取ろうと熱心に考え、図書館等の新美南吉の物語を進んで読んだり、「ごんぎつね」の続き話を進んで書こうとしたりしている。

【読むこと】

・場面の移り変わりに注意しながら、ごんや兵十の気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。

・読み取ったことを発表し合い、自他の考えの違いや仲間のよさに気づくことができる。

【書くこと】

・ごんや兵十の気持ちを読み取り、「ごんぎつね」の叙述から根拠を明らかにして、続き話を書くことができる。

・続き話を読み返し、文章の間違いを正したり、自分の表現したい心情をより明確に記述しているかを検討して書き直したりすることができる。

・続き話を発表し合い、書き手の考えの明確さ等について感想や意見を述べ合うことができる。

4 単元における主な言語活動 小学校学習指導要領解説 国語編 p 6 0 より

「書くこと」の言語活動例のア 身近なこと、想像したことなどを基に、詩をつくったり、物語を書いたりすること。

詩や物語などの文学的な文章を創作する言語活動である。

ここでは、学校や家庭、地域などで実際に見聞きしたり、行動したり、経験したりしたことや想像したことなどを基に、詩をつくったり物語を書いたりする。「C読むこと」(2)の「ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。」との関連を図り、詩や物語の基本的な特徴を理解し、書くことを楽しむようにすることが大切である。

詩は、凝固した表現であること、普通の文章と違った改行形式や連による構成になっていることといった特徴をもっていること、フィクション（虚構）の世界が物語られていること、冒頭部に状況や登場人物が設定され、事件とどの解決が繰り返され発端から結末へと至る事件展開によって構成されているなどの特徴をもっている。また、詩も物語も、語り手が、一人称や三人称などの視点から語っていく形式となっている。

中学年では、このような特徴を必ずしも十分満たさなくても、児童の思いを大切にしておいて創造的な表現をすることの楽しさを実感させることが大切である。

5 本単元のねらいに関わる児童の実態

(1)関心・意欲・態度（○：できている □：課題である）

○ 1 学期の単元「本と友だちになろう」では、あまんきみこの作品に興味をもって読む児童が多かった。

○ 1 学期の「詩を味わおう」の際、表現を工夫して自分らしい詩を作ることができた。

(2)読むこと（○：できている □：課題である）

○ 読み取りの視点を活用して、登場人物の心情や情景を読み取ることができる児童が多い。

○ 本文の叙述から、自分の考えを述べることができる児童が多い。

(3)書くこと（○：できている □：課題である）

○ 興味をもって書き、自分の思いなどを明確に伝えようと工夫して書ける児童がいる。

□ 自分の書いたものを仲間に紹介することはよくできるが、それについて感想や意見を述べることは消極的であり、自分の思いを相手に分かりやすく伝えようという意思が弱い。

6 研究テーマに関わって

(1)学習のユニバーサルデザイン化

ペア・グループ交流の位置付け

・児童の課題である「感想や意見を述べ合う弱さ」の克服を目指し、全体交流の前に、少人

数という利点のあるグループ交流を位置付けた。

- ・ 仲間の意見を自分の考えに取り入れてよりよいものにする時間を確保し、交流がその場で終わらず自分の考えを深めるために有効だという意識をもてるようにする。

登場人物の関わりを視覚化する掲示資料の工夫

- ・ ごとと兵十の関わりを見ただけで理解できるように、両者の関係を図式化する。
 - ・ 新美南吉の表現の工夫例を掲示として示し、続き話を書く参考にする。
- 優れた表現の記録シートの作成・仲間の作品のコピーの配布
- ・ 単元の導入時から新美南吉の作品を並行読書し、「ごんぎつね」やそれ以外の作品から心に残った表現を各自がワークシートに記録し、自分の表現に生かせるようにした。
 - ・ 「ごんぎつね」の続き話をグループで交流する際、仲間の発表を耳で聞くだけでは聞き落としたりして理解が不十分になる場合がある。そのため、視覚的支援として、仲間の作品のコピーを取り、グループに配布して、作品を目で見ながら発表が聞けるようにする。

(2)協同的に学び合う学習集団の育成

ペア・グループ交流の仕方の指導

- ・ グループ交流では、相手の考えを聞いて自分の考えと比べようとする態度、根拠となる本文の叙述を明らかにした発言方法、相手の発言内容を受け止める態度などを指導する。

(3)言語活動の充実を目指した単元指導計画の在り方

指導事項及び言語活動を系統的・発展的に配置した年間指導計画（年間）

- ・ 1 学期には「本と友だちになろう」の学習で、物語を読んで感想を述べ合う学習をした。本単元では、新美南吉の表現のよさをじっくりと読み味わい、本文の叙述に基づいて続き話を書く学習を行う。
- 第3次を中心とした言語活動の充実（各単元）
- ・ 第3次では、第2次で学んだ優れた表現を生かしながら、作品の雰囲気壊さないように続き話を書き、書いた話を交流して感想や意見を述べ合う言語活動を行う。
- 習得・活用のサイクルを生み出す系統的・発展的な単元構成
- ・ 本単元は「新美南吉の表現を味わい、続き話を書く単元」である。そこで、第1次では、新美南吉の生い立ちや主な作品を紹介し、作者や作品に対する児童の興味関心を引き出す。第2次では「ごんぎつね」等の作品を読み、情景描写や登場人物の行動描写等、優れた表現方法を習得させる。習得した表現方法を活用し、第3次の続き話を書く活動を行う。

(4)協同的な学び合いを通して、読みや表現を深める授業の在り方

児童が見通しと自分の願いをもち、学習の場を振り返る場の設定

- ・ 各自がめあてをもってグループ交流や全体交流を行い、授業の終末で振り返りをする。
- 言語活動の充実を目指した工夫改善
- ・ 本時は、「グループに分かれて、各自が書いた続き話を交流する言語活動」を行う。
 - ・ 続き話とは、「ごとと兵十の心情を十分に読み取った後で、6 場面の後、物語はどうなったかを想像して書いた話」のことである。続き話の創作を通して、「創造的な表現をする楽しさを実感させること」を目指す。
 - ・ 「本文の叙述に基づき、ごとと兵十の人柄や作品の世界観を壊さないように、作品の雰囲気を大切に書くこと」を条件とした。
- 協同的な学び合いを生み出す指導・援助の工夫
- ・ 続き話のグループ交流を行うが、話し合いが深まるように交流会の進め方を、掲示で示す。
 - ・ グループ交流の仕方を学ぶためには、「交流の仕方の実際的なモデルを見ること」が最も効果的である。そこで、授業の導入で「代表児童が続き話を発表し、全体で交流する場」を位置付けた。こうすることで、学級全体でグループ交流のイメージを実感的につかむことができ、グループでの話し合いが深まると考えた。

(5)他の活動との関連

日記における描写の活用

- ・ 日記を書く際、行動描写や情景描写等、本単元で学んだ表現の工夫を生かして書かせる。

7 単元指導計画（全 20 時間）

時	主な学習活動	指導・援助
1	本時の課題を確認する。	「ごんぎつね」の続き話を書くことを伝える。 新美南吉の表現方法に多く触れるため、単元と並行して読書を促す。 難語句や物語の時代背景特有の語句を調べ、ノートに書かせる。
2	単元の学習の見通しをもとに、 単元の学習の見通しをたてる。	
3	本時の課題を確認する。 「ごんぎつね」を書いた新美南吉は、どんな人だろう。 作者の説明を聞き、読み聞かせの感想を交流する。	
4	本時の課題を確認する。	読み聞かせの時、読み取らせたい表現を強調したり、ゆっくり読んだりして、大切な表現が多くあることに気づかせる。 感想・疑問・話し合いたいことの 3 観点に分けて板書し、各場面の課題と疑問や話し合いたいことが視覚的に分かりやすいようにする。
5	「ごんぎつね」の初めの感想をもとに、読み深めたいことを話し合おう。 範読後、感想・疑問・話し合いたいことを書き、交流する。	
6	本時の課題を確認する。	
7	ごんは、どんなきつねか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	ごんを中心とした関係図を活用し、ごんの性格や気持ち、それが分かる文が視覚的にとらえやすいようにする。 関係図と挿絵を活用することで、ごんの性格をイメージしやすいようにする。
8	本時の課題を確認する。	
9	兵十のおっかあが死んだことを知ったとき、ごんはどんな気持ちだったか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
10	本時の課題を確認する。	「なぜこんで」「かけもどりました」に注目させ、3 場面の前半は思いつきで、後半は同じ間違いをさけるために考えた行動であったことを、全体で確認する。 前半と後半のごんの気持ちの違いを考えさせる。
11	いわしを投げ込んだ時や、くりやまつたけを持っていた時、ごんはどんな気持ちだったか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
12	本時の課題を確認する。	
13	ごんはどんな気持ちで兵十と加助の後をついて行ったのか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	会話文や心内語、音で表現された情景を手がかりに、ごんの気持ちを読み取らせる。 「かげぼうしをふみふみ」の距離を実演させ、「なぜそんな近くをついて行ったのか」と発問する。
14	本時の課題を確認する。 ごんを撃った兵十はどんな気持ちだったか、読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
15	本時の課題を確認する。 兵十はどんな人物か、本文から読み取ろう。 「一人読み」の後、グループ・全体交流をする。	
16	本時の課題を確認する。	ごんと兵十の「心の距離」が最後にはつながっていることを再確認し、二人の関係性や物語の世界観を壊さない作品をつくることを説明する。 新美南吉の表現方法のメモをもとに、話に合った表現を使用するように伝える。
17	「ごんぎつね」の読み取りをもとにして、続きはどうなるかを考えよう。 今までの読み取りや表現方法を振り返る。 続き話を考えて書く。	
18	本時の課題を確認する。	
19	続き話を発表し合い、自分の作品を見直そう。 続き話をグループ交流し、アドバイスをもとに見直す。	推敲のため、人数分、作品を印刷して配付する。 「ごんぎつね」の世界観と合っているか、さらにふさわしい表現がないかを考え、アドバイスをする。
20	本時の課題を確認する。 自分たちの考えた続き話を発表し合い、感想や意見を交流しよう。 代表児童の発表の後、グループ交流をする。	

並行読書（新美南吉の表現方法集め）

8 本時のねらい

自分が書いた「ごんぎつね」の続き話の内容とその話にした理由をグループで発表し合い、感想や意見を述べ合って、様々な考えのよさや表現のよさを認め合うことができる。

9 本時の展開（20/20）

過程	主な学習活動	指導・援助
つかむ	本時の課題を確認する。 課題：自分たちの考えた続き話を発表し合い、感想や意見を交流しよう。 本時の進め方を確認する。 自分のめあてを確認し、ペアで交流する。 発表者Aさん：友だちの感想や意見を聞いて、自分が書いた続き話のよさを確かめたい。 聞く側Bさん：グループ交流で、叙述に基づいて意見を活発に言いたい。	前時までに、続き話と、自分がその話にした理由をワークシートにまとめておく。 グループ交流のために、各グループで進行の仕方や分担・発表順を事前に決めておく。 自分のめあてを声に出して伝えることで、めあての自覚化を図る。また、ペアが互いのめあてを知ることによって、授業の終末で相互評価ができるようにする。
広げる	代表児童の続き話を聞く。 ・代表児童は、グループ交流での発表方法と同じように、その話にした理由も発表する。 (代表児童の続き話の例) 兵十は、ごんのお墓をつくりました。おっかあのお墓のとなりにつくりました。そして、毎日、おっかあとおんのお墓参りをしました。(以下、略) 代表児童の作品の感想や意見を全体交流する。 ・代表児童の作品の表現のよさを話し合う。 ・本文の叙述を基にして、感想や意見を述べる。 ・仲間の感想や意見を聞いて、自分の感想や意見と比べ、つなげて感想や意見を述べる。 (聞き手の感想や意見) おっかあのお墓のとなりにごんのお墓をつくったところに、ごんを大切に作る兵十の気持ちが表れています。	《全体交流での指導・援助》 代表児童の選出に当たっては、「本文の根拠が明確であり、表現を工夫して書いてある児童」を選ぶ。その児童の作品をプリントして全員に配布する。 全体交流を位置付けることで、グループ交流の進め方や深め方（特に感想や意見の述べ方）を全体で学ぶ。 読み取りの視点を意識させ、本文を基にして感想や意見が出せるようにする。 グループ交流のモデルとなるような感想や意見を述べた児童を価値付け、感想や意見の述べ方を全体に広げる。
深める	グループ交流の仕方を確認する。 グループごとに、続き話の交流をする。 (発表者) 続き話の音読をし、その話を書いた理由を、本文を根拠に述べる。 (発表者以外の児童) 発表者の話について感想や意見を述べる。 (全 員) 他の児童の感想や意見に対して、感想や意見を述べる。 (発表者) 他の児童の感想や意見により、自分の考えや表現のよさを確かめる。また、さらによくする見通しをもつ。 (全 員) 仲間の感想や意見を聞いて、それぞれがよく考えており、よさがあることを認め合う。	《グループ交流での指導・援助》 交流会の進め方で気をつけることを確認する。 司会者がグループ交流を進める参考となるように、司会進行表を準備し、事前指導をする。 発表者の作品を目でも追い、相手の話が十分に理解できるように、作品のコピーを準備する。 本文の叙述を確認できるように、第2次の読み取りで使ったプリントを机上に置いておくように指示する。 よく考えて発言している児童の感想や意見の内容を紹介するなどして、話し合いが深まるようにさせる。
まとめる	自己評価をする。 ・評価項目にあわせて自己評価をし、ペアで交流する。 発表者Aさん：仲間の感想や意見を聞いて、自分の表現のよさを確かめることができた。 聞く側Bさん：仲間の発表を聞いて、叙述に基づいて感想や意見が言えた。それに、仲間の意見に付け加えることができた。	作品の表現、感想や意見の述べ方などについて評価し、よさを認める。 グループ交流の中で考えが次第に深まっていった児童の例をあげてほめる。